

私の学校の校長先生は総理大臣

教育委員 野上 武利

最近教育を巡り、暗いニュースが流れることが多いが、教育委員の職務の一環に学校訪問がある。さいたま市は人口 130 万人を超える大都市であり学校数も小・中・高・中等教育・特別支援学校 169 校を数える。現在までに訪問した学校は 70 余校になるが、それでも未訪問校がまだ百校近くある。

そうした中、昨年秋訪問したある学校で驚いたことがあった。いつものことだが学校の概況を聞くために通された校長室で、真っ先に目に飛び込んできたのが壁に架かる巨大な扁額。そこには毛筆による四つの文字が墨書されていた。あまりに達筆で直ちに読みとれない。それでは執筆者はいかなる人物かと片隅の書を見るが、これまた達筆で読み取ることができずしばらく傍観していた私を見かねてか、校長が概況説明のため差し出した学校案内の表紙を見て飛び上がるほど驚いた。

そこには、この扁額の写真とともに「初代校長 清浦奎吾先生書（第 23 代内閣総理大臣）」と、執筆者の名前があるではないか。

総理大臣が初代校長！ このことだけでも驚いたが、なぜこうした人物が校長として赴任したのか、興味がつのり人物調べをしてみた。パソコンで「清浦奎吾」を検索すると、確かにこの小学校の初代校長であったことが紹介されている。事実であることが判明すると、なぜここにこの好奇心が湧いた。

ところで、後に総理大臣となったこの人物が初代校長を務めた小学校の存在をご存じだろうか。さいたま市見沼区大字東宮下にある「さいたま市立七里小学校」が、総理大臣清浦奎吾が初代校長を務めた小学校。校長となったのは明治 5 年 11 月で 24 歳の時。明治 5 年と云えば徳川幕府に代わり明治政府が誕生して間もない 5 年目。町の中には、まだ頭にチョンマゲ、腰に刀を差していた時で世情はまだ不安定な時期。その不安定な状況を克服する手立てとしても教育が不可欠として維新政府は最優先の施策として教育に取り組んだ。

早期の近代国家樹立のため維新政府は、村にあっても、またいかなる家にも教育を受けない者は存在しないと云う皆教育の仕組み「学制」を、明治 4 年施行した。

廃藩置県により県となった埼玉においても学制施行により学校設置が図られたが、県内には徳川時代、幕府中枢の老中を数多く輩出し、幕府を支えた岩槻城、川越城、忍城があり、維新政府にとっては危機管理上最も配慮すべき地域だったと推測される。

そこで維新政府は新生埼玉県の初代県令に討幕の中心的存在であった薩摩藩士の野村盛秀を配した。その野村は民心安定と新生国家づくりに欠かせない人材育成のため熊本出身の清浦を呼び寄せ教育に当たらせた。

何故、赴任した学校が県庁所在地の浦和近辺でなく七里だったのか。私見だが維新政府にとり杞憂があるとすれば、徳川幕府を支えてきた拠点の岩槻城関係者の動向で、こうした地域の安定化を図る上でも信頼のおける清浦を登用したのではと推測している。

県令野村が呼び寄せた清浦が単なる官吏でない証拠には、その後中央政府の中で現在の法務大臣に当たる司法相、農商務相（現在であれば農水大臣、経済産業大臣）を経て大正 13 年（1924 年）、第 23 代内閣総理大臣となるのだからその能吏ぶりは大変なものだったに違いない。激動の時代だったとは言え初代校長が後に総理大臣になるケースはそうあることではなく極めて希有なのではあるまいか。

現在教育改革が大いに叫ばれているが、七里小学校が設立された時代は今以上に体制変換による混迷と、厳しさがあつたに違いなく、にもかかわらず教育が近代国家形成への最優先課題として取り上げ邁進した維新時のリーダーたちの志の高さに改めて感嘆するとともに、そうした先進的な DNA を内包、受け継ぐさいたま市教育に限りない未来を感じながら七里小学校を後にした。